

先生の働き過ぎ、是正を

12月議会本会議で、「教職員の働き方」について質問しました。10月末に政府が「過労死等対策白書」を発表しましたが、その重点5業種のひとつに「教職員」があげられています。全国調査では、1日当たりの平均勤務時間が通常期の小学校で11時間15分、中学校11時間17分という長さで、これは「過労死ライン」の月80時間を超える時間外労働が常習化していると、白書では指摘されています。

鈴鹿市の小中学校の先生はどうか？市教委の答弁では、平均時間外労働は小学校26.5時間、中学校40.6時間、80時間以上は小学校60人、中学校589人とのことでした。私は、現場はもっと多く働いているのではないか。ある小学校の先生の話では「朝は早い人は6時、ほとんどの先生が7時ごろには出勤している。夜は8~9時までが普通。子どもが登校している時間帯は、授業などが過密にあり、デスクワークは子どもが帰ってから、早朝や休日にもする。」これが実態ではないか、と指摘しました。そしてタイムカード導入など、正確に労働時間を記録することを求めました。

「土曜授業」やめるなど負担へらす努力と工夫を

この実態を改善するには、先生をふやすか、仕事量をへらすしかないが、実際は人はふえず、新たなメニューの仕事が増えています。現場の先生は、いま負担に感じるものは「土曜授業、新たな教科(道徳・英語・プログラミング)、外国人児童への対応、さらに中学校ではクラブ活動」と言っています。私は少しでも負担をへらすために、市教委の裁量でできることの実行、また事務補助スタッフなど人的支援をすることを求めました。

中でも「土曜授業」は、当初は毎月1回、年8回で始まったが、評判が悪いので今年は年3回にへらしています。しかし県教委のまとめでも、児童生徒の8割、保護者の過半数、教職員の9割が「やめてほしい」と言っています。市教委は来年も行なうとしていますが、私は「年3回ではなく、きっぱりゼロにすべきだ」と検討を求めました。

あぶない通学路、安全なルートに

市議会一般質問で、通学路の安全について取り上げました。写真の場所は高塚町・加佐登小前の県道交差点です。白鳥中に通学する生徒が、この百メートル足らずの区間だけ、車の多い県道を通ります。その手前までの安全な道からこの道に出るのは、小学校の運動場敷地を通れないからです。

私は、小学校の敷地を通れるように工夫すれば、危険な県道を通らずに行けるのではないかと提案しました。



高塚町・加佐登小前の県道を通る中学生



国道306号・伊船町～東庄内町の山沿い区間

こちらは伊船町から東庄内町への国道306号、車が多く歩道のない道が鈴峰中の通学路になっています。この区間1.1キロは、来年から県が歩道整備工事にかかりますが、その完成までの期間も、この道を自転車で通るのは危険です。私は、別のルート（鈴峰ゴルフ場を通る市道）の方が安全では、と提案しました。

以前と比べて格段に通る車がふえてきた西部地域。幹線道路を通学路にしている箇所はとくに危険になっています。事故が起こってからでは遅いので、早期にルートの見直しが求められます。市教委は、主要幹線道路を通学路に指定している箇所の安全確保について、学校と確認作業を進めていくと答えました。

国道306伊船バイパス、来年早期に供用開始

建設工事が進んでいる伊船バイパス第2工区約1キロは、来年3月末に完成予定ですが県鈴鹿建設事務所は、車道部分の工事が完了すれば歩道部分を残したまま早く、出来れば来年早々に通行できるようにしたい、と表明しました。このバイパスが全面供用されれば、大半の通過車両はバイパスに回り、伊船町・長沢町の中を通る旧道の通行が格段に減ることになり、安全になります。さらに4月からは市道に変更され、歩行者優先に改良される予定です。

入道岳の登山道が修繕されました



石などで足場を作って安全になった急斜面

急斜面の砂利道では、滑って転ばないように石を入れて足場を作ってあり、また道をふさいでいた大きな倒木も切られて、通りやすくなっています。谷を渡る場所には迷わないように赤のペンキで矢印が書かれ、木の枝にピンクのリボンで案内がされています。

山岳会の皆さん、車の入らない山道を機材などかっいで登り、大変な作業をしていたのですが、市から費用はどれほど出たのか聞くと、「1人1500円」とのこと。昼飯代程度の御礼で、まったくのボランティアです。感謝すると共に、せめて消防団の出動手当ほどの日当くらいは出すべきではないかと思いました。

6月議会の一般質問で私は、入道岳の登山道「井戸谷コース」が荒れて危険な状態のままであることを指摘、修繕を求めました。その後、秋になって鈴鹿山岳会の皆さんが修繕をしていただいたと聞き、11月末に山を登りながら現場を見てきました。

急斜面の砂利道では、滑って転ばない



倒木を切って通りやすくなった道

秋の後援会バス旅行、48年ぶりの「太陽の塔」



11月25日、恒例の鈴鹿市共産党後援会「秋のバス旅行」、今回の行先は大阪・万博公園「太陽の塔」と、日清食品「カップヌードルミュージアム」。

1970年の大阪万国博、私は高校生でしたが7月に学校サボって友人と出かけました。すごい人波と世界各国のパビリオンに驚きながら会場を回りました。そのシンボル「太陽の塔」に再会、当時は外から眺めるだけだった塔の内部を上がり、修理再現された「生命の樹」を見学してきました。

ずいそう



インスタントラーメン考

いま話題のNHK朝ドラマ「まんぷく」のモデルとなった、インスタントラーメンの創始者・安藤百福。そのラーメン発祥の地・大阪府池田市に、「カップヌードルミュージアム」（安藤百福発明記念館）を後援会旅行で訪ねた。1958年この地で生まれた「チキンラーメン」が、その後日本中に広がっていき、1971年「カップヌードル」発明でさらに世界中に広がった。いまやインスタントラーメンは、世界各国で年間850億食、日本国内では53億食が消費されているという驚異的な食品になった。

私が子どもの頃、テレビCMで「3分間待つのだぞ」のセリフを聞いたのがラーメンとの出会いの始まりだったか。多種多様なラーメンが登場した。いちばんお世話になったのは、大学生になって寮や下宿で暮らした時代、朝昼晩、夜食に本当



によく食べた。金欠になっても、これがあればまず安藤百福さんの銅像の前では安心。余裕ができると卵や野菜、肉、餅など入れて、ぜいたくな気分になった。いちばん驚いたのが、先輩の皆さんがナベで煮たラーメンを、ドンブリに移さずそのままナベから食べるのを初めて見た時だったが、そのうち自分も慣れてしまった。洗う食器が一つで済むのが、最大のメリットだった。

世界の人類に愛される 1のファーストフード

8月に中学高校と同級だったS君の話を聞く機会があった。S君はなんと！いまや業界の大手、あの「サッポロ一番」のサンヨー食品販売の副社長に出世しているのである。S君曰く、いま国内シェアの一番は日清食品であるが、米国や中国を加えた世界規模ではサンヨーがトップである。また、ラーメン製造には常に研究、進歩の努力がある。例えば「サッポロ一番」に使用する麺は、塩・醤油・味噌それぞれに断面が丸・楕円・四角と変えてある。味付けも地域、国によって好まれるものにする、などなど。その奥深さに感心し、世界人類の食卓のためにがんばっているS君に共感したのであった。